

最優秀賞

道端に枯れた花

神奈川県立麻生高等学校 二年

丸山 優月

浜辺を疾走しながら叫んだ
塩水の塊に落ちる
浮き袋のせいで沈めないまま
体に染み込む水分を
スポンジの舌で
ゆっくり味わった
蛇管に塩水がつたう
君の味によく似てる
冷えた体をあつたかい砂の鉄板で焼く
私の匂いの湯煙は朱色の空まで届くかな
塩水を吸い上げすぎた目から水が垂れた
私には大きすぎるTシャツで拭いたら
余計に寂しくなった
投げ捨てたサンダルを拾い集めて
ママじゃないけどチャリに乗った

段ボールが落ちてるから拾おう
君がいなくなつて広くなつたアパートに帰つた

狭い空間が恋しくて

ガムテープで段ボールを直した

昔君はいじめて段ボールに籠つて

でてこなかったことがあつたね

でもその後ちゃんと仲直りして

君が段ボールから出てきた時

どつちも花みたいな笑顔だつたな

今日は内側からガムテープを貼る

そしてさよなら

優秀賞

辞書を引く

神奈川県立横浜翠嵐高等学校 二年

伊集院 亜衣

辞書には世話になっている

たぶんバスより多く使っている

今日は三時間目の古典で

一回も使わなかった

それは、銀河。ギンガリゼーションであるよ。

天の川が二つになると地球が終わるらしいけど、

この世界を救うための合い言葉は

「地学準備室」

ああ。それってなんか、**紅生姜**。べにしょりがりぜーしょんです。

たぶん焼きそばかたこ焼きのそれと似ている

でも毎日辛い、だから

クッキーに混ぜた

お湯、まんたんのお湯でクッキーをふやかし続ける老婆

命題Ⅱ表

そこにコンフレークが…!!

それはとても甘美なものであるよ

「『おーい、お茶。』ってタカヤマが。」

冷たい

そう、私はひんやりとした空間でくらげを見ていたのだった

いや、私がかくらげだったのかもしれない

M O M I

という概念

あなたのその意欲を買いたい

バーゲンでこの前売っていたような気がする

売っていたような気がするのだ

整然と並べられた辞書のように

優秀賞

クレイハートの臨床試験

神奈川県立麻生高等学校 三年

山崎 早恵

一緒に歌を歌おうか

7ミリの罫線のノートに吐き出す、無気力で優しい母の話
昔拾ったボトルメールにささやく、粘着質で無粋な父の話
誕生日にもらった砂時計に漏らす、偏屈でむなし僕の話
悲しくなっても歌は聞こえる

ガラクタまみれの身体になっても

お人形のままでもいい

きつと この町に郵便は来ないから

部屋でハーブティーを飲んでいても

ちつとも安らぐことなんてないじゃない

ノスタルジックの失墜とちいさな狡い魔女

たとえ喜劇の中の悲劇だったとしても

決して誰かが望んだ悲劇ではなかった

悲劇にあこがれる少年には 夢の様にもまた明日、と

この心に

まだ見ぬ廃墟を気にするだけの余裕はない
無くす記憶はゼログラム

脆く砕けた 臨床試験

佳作

時間

神奈川県立麻生高等学校 二年

関谷 実咲

九月の中旬なのに蟬が鳴く

木々が空を覆い、点々と漏れる光

私はまだ目が開かない

脳が動かない

ジャリジャリと木の実やら小枝を踏んでは

ハンカチを首元にあてる

汗ばむ背中に生暖かい風が吹く

じんわりと溶けていくようだ

誰もいない朝の教室

目を閉じて耳を澄ませば

騒がしい風景が思い浮かぶ

普段では味わえない時間

目を開けて耳を澄ませば

机に浮かび上がるカーテンの影

ノートのページが捲れる音

数々の机が教卓にいる私を威圧しているようだ

そろそろみんなが来る時間

九月の中旬なのに蟬が鳴く

佳 作

女の子

宮城・聖ウルスラ学院英智高等学校 三年

金森 悠夏

心の温度がぐっと下がり
あの子が傷つくであろう問いを心で小さく投げかける

今日のあの子は特に女の子している
声の上澄みがいつもより澄んでいて
しぐさの一つ一つに神経を通してしていることに
私は気が付いている
イマドキではないからあからさまではないけれど

心の端が少し溶けるくらいの毒を
あの子が言葉に含ませた理由を私は知っている
だから傷ついた顔を見せてはあげない

でも

座り込んだ円の中で
悪口を添えたバスケットボールを回し合うあの子の姿は
人間らしくて

女らしくて

そのことに落胆した

たぶん私は女の子をするあの子を軽蔑しながら

女の子であり続けるその姿を求めていたのかもしれない

駅前で見かけた彼女は

背伸びすることもなく

コスメシヨップの背景に溶け込んでいて

視線が交じり合うこともなく

私は人の流れに合流した

女の子をするあの子は

不思議と魅力的で

限られた時間に彩られていた

今日も私は反射した窓ガラス越しに

あの子の中から去っていく女の子の姿を

惜しみながら探すだろう

佳 作

The West Exit. (西口)

埼玉県立鴻巣高等学校 二年

加藤 優奈

テロン テロン テロン
青い踏切に花束が一つ
貴方だけは忘れないでいて

※ テロン テロン テロン
女の子の匂いをつれて
スチームパンクな駅前に行く
前を向いたらピンヒール
下を向いたらゲロと痰

※踏切警報機の音

テロン テロン テロン
今日も子供が働きに
地獄町 チャリを漕いでいく
まともな野郎は消えてった
電車に乗って 働きに

テロン テロン テロン
明日の電車は何に泣く？
今日も止まった高崎線
前のめり 下を向いて歩く
死んだのは私みたいな女

雨の日

香川県立観音寺第一高等学校 二年

宇草 和弥

雨を見ていた

曇り空から、雨が降り出し、丸く落ちる

滑らかな直線、風に煽られて、曲線

透明が重なって、白、更に重なって、青

アスファルトの、車窓の、猫の上に、落ちて

弾かれて、もう一度、宙に

粒が青く、放物線を描き

街の光が、中で混じり

もう一度、夢を見て

落ちた？それだけ

もう、跳ねない

空を眺めると

まだ曇り空

光は弱く

街中に

また

雨

曇り空を見て、僕は笑った。
晴れていたらきつと出なかった、笑顔だ。

虚偽の申告

神奈川県立横浜翠嵐高等学校 三年

原 唯菜

まずは言葉の話をしよう
やかんが音をたてるまで
豊かな国に生きていて
ただぼうつと過してる

悲しいと思わないかい？

ノスタルジアを追い求め
メカニカルには程遠い
ルポルタージュは曖昧な
カタストロフィをもたらす
とかく人々は忙しい
ルビーグレープフルーツを
したたかに踏んだところで
理由づけすらしらないだろう

——本当に？

ずっと考えていたんだ
表立っては言わないが
もちろん忘れたわけじゃない

しかとその目に焼きつけて
論じるなりなんなりすればいい

今に始まったことじゃないって？

からかわないでくれたまえ
ランダム・ウォークの問いよりも
よほど簡単はずだろう

もしも君がかたくなに
領かないと言うならば

ねばりたいたいだけねばればいい
面倒なことになるけどね

類概念の反対を

特別小さくしていけば

ミイズムすら超えるほど
無き事をまたくり返す

擬人化された人々が

最たる例と言えようか

いつの間にか消えていて
忽然とまた現れる

嘘みたいだけど、本当なんだ。

入選

昼夜と電車

埼玉県立深谷商業高等学校 一年

柳田 琴音

夜、電車の音がするんだ。

駅は遠いし、おまけにボクは布団でとつくにまどろむ時間なのに。ガタゴトガタゴト繰り返しボクを起こすんだ。ボクはこれを聞くとなんとも言えない気分になるんだよ。なんてこんな汚い毎日生きてるのかってね。ああ、いい音だな。あの子にも聞かせてあげたいよ。

あの子、すぐねちやうんだよ。

すぐにねちやうあの子に、電車に乗って今すぐ会いに行きたいよね。そして、あのきれいで長いまつげに深い青を落としたい。

昼は優しくないからきらいなんだ。明るいど皆の中の汚い部分が丸見えでさ。生きたくなくなるよ。夜は暗くて君がねちやうけど、三十分でも君と話せる分、幾らかました。なんで生きてるのか理由なんて幸か不幸か、君以外の何でもないね。実感して目をとじた。

入選

意識

群馬県立桐生女子高等学校 一年

沖村 南美

ところでみんな息してる？

息をしているかどうかと聞かれるとよけいに意識して息をしてしまう。

ところでみんなまばたきしてる？

まばたきをしているかどうかと聞かれると

よけいに意識してまばたきしてしまふ。

これは意識だ。意識のせいだ。

無意識だったのに、

無をはずされてしまった。

無は何もないという意味なのに

無を奪われてしまった。

悔しい。悔しい。

してやられた。

なんでそんなこと言ったんだ！

息をするときの一回一回が深呼吸に

まばたきをするときの一回一回が寝てるみたいに

全部がぎこちなくなつて、行動が支配される。

支配される、という意識も入ったせいで

他のみんなも支配されているのだろうか

前の席の子、横の席の子、もしかしたら、机、椅子、ふでば

こなんかも、全部が気になつて、気になつて、

と、やってるうちに、いろいろなんか忘れてた。

なんだ、これでよかったんだ。

これですっかり解決じゃないか。

よかったよかった、めでたしめでたし。

ところでみんな息してる？

入選

十分じゅうぶん(或いは放課後)

奈良県立奈良北高等学校 三年

山野 あやね

指の形をした貝殻が残す
暗い緑の壁に浮かぶそれを、
柔らかく弾力のある老竹で
撫で下ろす
緑と緑の間でそれは
擦れて
白い煙になってしまふ
舞い降りて
溶けない雪になってしまふ
それは吸っても葉のように
喉から水を取るだけで
人生にはならない
それに触れても狼のように
母山羊に化けるだけで
知識にはならない

距離を取り木に座り下を見る
細い鼠が三十五列に並ぶ
その中には梅擬や螢の光も並ぶ

前には『黒』と呼ばれる

緑が広がっている

ツルっとした黒は

さらっとした白

そして灰

やがて無色となって

文字は 言葉は

私たちを育てる

入選

海と人間

長野県諏訪清陵高等学校 三年

小野木 葉月

僕らは高度な技術の中に埋もれている
自由に泳ぐ時代にいる
大きな鯉 小さな金魚
それぞれは違っても
それぞれはそれぞれなのだ
筆の海が黒く羅列する
それは世界が減ぶ寸前のように
ブルーライトが世界を照らす
青白い肌が触れ合いたい
その光を見つめる
光が突然消えてしまふと
人は惑う
魚は磁力を失い泳ぎ泣く
バスを待つ
海になった待合室で
そこでは人間性が失われない
あの頃は輝いていた
海を見つめていても飽きなかった
ただ今は下を俯くばかりで

それが当たり前で
当たり前が当たり前になる
それが当たり前なのだけれど

魚は泳ぐのだ

必ず前を向いて

それが当たり前なのに

当たり前ではないのだ

こだまは返ってこない

山はあるのに返ってこない

それは海の中だからだろうか

いや

それは違う

山はこだまを知っている

けれど返さない

返してくれない

清き水は枯れてしまったのか

魚は魚だ

魚は共喰いをする

弱者は強者になる

群れを作ろうあの赤い魚を瞳にして

生き延びよう

矛盾が成り立つこの世界で

入選

そして私は制服を着る

神奈川県立麻生高等学校 三年

村松 苗青

私の愛しき友よ

(この世はあまりに広くって、どうせなら生まれたときから生きる道を指し示してくれればいいのにと、そういったあなたの横顔は少しだけ嬉しそうだった。人間ほど自由で縛られた生き物はいないと、そういうあなたは。知ったようなことを吐き出すその唇の薄さと、呪いのようにまっすぐ伸びた髪を見て、皮肉にもほどがあるなと思った。確かに私はそう思ったのだ)

桜に攫われそうだと告げたことをあなたは覚えているのだろうか。或いはその答えを覚えているだろうか。君は私を笑うでもなく、罵倒するでもなく、ただ私の瞳をまっすぐにとらえて、攫って見せてよ といった。嘲るように笑っていたのだ。

(私は私が誘拐犯として生まれなかつたことを悔いた。確かにあなたの言うとおりに生まれてきたのであれば、あなたを攫うことを躊躇うこともなかつたのだろう。細い身体を引き寄せて、すっぽりと腕の中に収めたまま桜の海に飛び込むこともできたはずなのに。私はただあなたの笑みを痛々しく思うだけで、指の一本だつて動かしはしなかつたのだ。それはあまりに哀しいことで、誰かが好みそうな救いような話である。)

あなたは桜に浚われることはなかつたけれど、ただひっそりと消えていった。猫が死の直前に姿を消すように、もしくは初めからいなかつたとも言いたげに。ただただひっそりと消えていった。(それから私はあなたを見ていない。そのまっすぐな黒髪をなびかせて、或いはバツサリと切りそろえて、春の亡霊のようにまた私の前に現れるのかもしれない。そんな妄想を抱いたままに、私は今日もセーラー服に腕を通す。)

入選

慈悲深き希望論

神奈川県立麻生高等学校 二年

川嶋 美沙希

信じていいよと言って

まるで生まれた国が違うみたいな顔をして私を調子に乗らせて

ああ、五感がうずうずして気が気でない

二人の間にあるのはほら、あの二文字だけ

私を箱の奥にしまわないでこの二人ならどうにもならないことだつてどうにかなる神様がそうおっしゃっている

ここは慎重に行きましょう

そこは勢いのままに行きましょういつから保険をかけるようになったのだろう

嘘偽りのない笑顔をあとい回見るためなら

真っ直ぐ走れた自分は何処に逃げたのだろう

片足でも前に進めるはず
入道雲をすり抜けた先
きつとどこかで貴方は鳴いている
そしてここらであいつも鳴いている

ドラマの中じゃちようどヒーロー
のお出ましか
それとももつと奥に押し込まれるか

この精神かけた一発勝負
あいにく誰にも譲れるものじゃない
握って潰さないように
離して逃がさないように
やっと同じ方向を
向けたかもしれない

私の心は針金みたいにすぐ歪むんだ
貴方の形に合わせられるんだ
肩幅の大きさには敵わないかもしれ
ないけど
背伸び位出来るなら

うわあとと思えば後には引けない
こうしている間にも
また

入 選

僕には聞こえない

神奈川県立麻生高等学校 二年

小村 瑠菜

気が付けば始まった夏休み
暑い部活

太陽に照らされるハードル
無造作に放り出されたバトンとストップウォッチ

ベンチに置かれた真新しいタスキ

ラインカーは曲線と直線を完璧に描いていた

部活終わりの君はプール上がりのようで

私はあわてて顔をそらすけど

振り向くと

君の背中は私の目線より少し高いところにあった

冷たいスポーツドリンクを入れて水滴に濡れたボトル

個包装してある塩分補給用のタブレット

私は渡すだけ

部員のタイムを書く記録用紙

私は測って、結果を彼に伝えるだけ

「明日の大会頑張って」

彼には聞こえない声で

入 選

色鉛筆のはぐれ者

神奈川県立麻生高等学校 二年

矢田 安侑子

あの日虹色の夜を見た

憂いを帯びた君の目から零れた宝石に

僕の姿がなかったから

相変わらず赤いクレヨンの頬に

僕の夢を預けて

恋した罰を待っていたのだ

この青い世界で君は一人

冷気を飲み干したたずんでいた

投げた心の行方も知らず

二分前へ駆け出した

熟れた気持ちとサンダルと

思い出せない青空で

降り注ぐ愛が空に溶けたとき

藍色の少女が泣き出した

何処かに咲いた想いも

一つ残らず枯れた夜

白々しく笑ってみた

入選

画面の向こう

東京・麹町学園女子高等学校 二年

内山 綾

お客様がやってきた

イエスもノーも知らぬ田舎者

礼儀を無視して楽しいか

画面の向こうはサーカスだ

みんな狂ったように手を叩き

仮面を被ると安心して

体を刺しても気がつかない

世界にひとつの灯を

誰が弁償するのかな

素敵な学び舎大発見

饒舌教師が講義中

たくさん学べてうれしいね

画面の向こうで勉強会

みんな狂ったように集まって

わかりましたと喜んで

赤点とっても見て見ぬふり

脳裏にひとつの気持ちしか

残っていないなら苦しいね

罪も幸せも絶望も

一瞬で吐き出せる画面の向こう

とても素敵なところだけど

たまには顔を上げてほしい

それからいつもの場所で集まって

たくさん話そう笑顔でさ

それで明日を夢見てさ

肩組んで一緒に帰ろうよ

入選

ごんご

岡山・津山工業高等専門学校 二年

石井 琢朗

今日の河原では

珍しく河童が芋を洗っている

いつもと違う喧騒にまみれて

LEDの赤提灯がさんざめく

「あそこの唐揚げがおいしそう」

「なんだか気分が悪い」

そう嬉々として吐き捨てながら

ぼくらは自ら芋に成り下がる

そこで誰もが口にし

誰の耳にも残らない

この油泥の食卓の主の名が

夜の群をつんざく

火薬の香りで化粧をした芋たちは

いよいよそろそろ歩きを始める

楽しそうに、河童の、昏き口の中へ

ではそろそろ

いただきます

現代詩の部選評

詩人

水無田気流

今回で、本コンテストは二回目の選考を務めさせていただきました。現代詩部門への応募作品数は、昨年は六五二篇でしたが、今年は一三七八篇と倍以上の応募となり、嬉しい限りです。今回は全体を通じて「虚(うつろ)」という言葉を使う人の多さが印象に残ったと感想を述べましたが、今回はもう少し、言葉の表層と内実のずれを意図的に描いた作品が目立ったように思いました。

奇しくも、二〇一七年流行語・新語大賞を受賞した言葉は、「忬度」と「インスタ映え」で、ともにコミュニケーションにおける表層と内実の、いわく言いがたいずれを表明しているようにも見えました。前者は、話者の意図を聞き手が慮ることを要請してしまうという、文化人類学者のエドワード・T・ホールの指摘した日本人の「ハイ・コンテクスト文化」特性が政治の場でも今なお大きな力を持つことの証左でしょう。後者は、文字通り「見せたい自分」を日常的に過剰に演出するという意味で、消費が劇場化した現代社会を象徴しているように思います。

制度学派経済学の創始者ソースタイン・ヴェブレンは、かつて有閑階級が富裕層である自己を周囲に喧伝するために派手な見せびらかし消費を行うことを、「誇示的消費」と呼びましたが、差し詰めインスタ映えに代表される消費行為は、メディア化された「明るく楽しい消費者階層」であることを見せびらかすための、「新・誇示的消費」とでも呼べば良いでしょうか。

SNS、とりわけインスタグラムやLINEなどは若年層の利用者が多く、「スマホネイティブ」と呼ばれる高校生のみなさんは、おそらく

デジタル・コミュニケーションが日常にあふれる生活を送っていることと思います。その意味で、言葉で「伝えられるもの/伝えられないもの」とデジタル・コミュニケーションとの差異を意図的に盛り込み得たような作品が、やはり良作として印象に残りました。

現代詩は、その表現技法上エンターテインメント性が低く、今回も全体的に動きのない、スタティックな作品が多く見られました(決してそれが、作品として悪いという訳ではないのです)。そのような中で、最優秀賞となった丸山優月さんの「道端に枯れた花」は、「疾走」「叫んだ」「鉄板で焼く」「チャリに乗った」等、動きがありかつ強い表現が縁語のように連ねてある作品で、異彩を放っていました。通常、このような強い表現を隙間なく続けると過剰になってしまうがちで、ベタなパワーポップのリリックのようになる恐れもあるのですが、詩の速度と時間のずれの描き方のバランスが絶妙なため、良い意味で壊れています。

優秀賞となった伊集院亜衣さんの「辞書を引く」は、文字の大きさまで工夫した、有名詩人で言えば吉増剛造さんの手法がポップになったような印象の作品でした。「世話になつて」「バスと辞書。意欲を「買う」がずれて、「パーゲンセール」に。商品名と意思表明の、ずれ、ずれ、ずれ。とてもクレバーな詩だと思いましたが。難を言えば、終連の「行、必要でしようか。それよりも、その前の行「売っていたような気がするのだ」で止めた方が、詩がもっと快適に壊れたのではないのでしょうか。

同じく優秀賞となった山崎早恵さんの「クレイハートの臨床試験」も、「7ミリの野線のノート」「ポトルメール」「ガラタタまみれの身体」「ノスタルジックの失墜」と、家族成員との対が見事でした。日本語のカタカナ遣いは表意文字性をむき出しにする特性があるので、読み手に無機質な音の感触を響かせる効果があるので

すが、上手い使い方だと思えます。ただ、本作もそうですが、終連の「脆く砕けた 臨床試験」で、オチをつける必要はあったでしょうか。その前の行、「無くす記憶はゼログラム」で止めた方が、絶妙な不協和音で終わる曲のようで、良かったのではないのでしょうか。優秀作二篇は、このように上手いけれども言葉を壊す勇氣が若干足りなかつたかな……という点で、若干残念でした。これは、他の佳作や入選作にも通じる点です。

詩は、壊れるべきなのです。なぜなら、言葉はコミュニケーションの道具として十全に機能しきつてしまうと、詩情が入り込む余地がなくなってしまう傾向が見られるからです。言葉を壊すためには、通常の言語使用のときに纏う「言葉の鎧」のようなものを、ぼろぼろと落としていく必要があると、私は思っています。

● 水無田気流(みなした・きりう)

昭和四十五年神奈川県生まれ。早稲田大学大学院社会科学研究科博士後期課程単位取得満期退学。平成十四年から、水無田気流の筆名で思潮社の『現代詩手帖』に詩作品の投稿をはじめ、平成十五年(第41回現代詩手帖賞を受賞。平成十七年に『音速平和sonic peace』(思潮社)を出版、翌年に同作で第11回中原中也賞受賞。平成二十年、『Z境』で第49回晩翠賞受賞。また社会学者としても活動し、学術論文の執筆などを行うほか、評論に『シングルマザーの貧困』(光文社新書、平成26年)、『居場所』のない男「時間」がない女(日本経済新聞出版社、平成27年)等多数。平成二十五年度朝日新聞書評委員に就任。平成二十八年四月より國學院大學経済学部教授。